プロティノスのエネアデス
「プロティノスの可能的なものと現実的なものについて」II-5-(25)

http://www.gutenberg.org/files/42930/42930-h/42930-h.htm

訳注における著者名のない引用はプラトンの著書である

通常、自分なりの注を加えてあるので、オレンジ色で示すことにする

デュナミスを可能性、あるいは能力と訳すると、
デュナメイ(δύναμεις)が可能態にある、と訳される；例：可能態にある知性（ヌース・デュナメイである。

すなわち、可能性：デュナミス
可能態にある：デュナメイ
可能的、可能態にある：対応なし

すなわち、現実性、現実態：エネルゲイア
現実態にある：対応なし
現実的：リアリスティックな

「現実的」とは、実現に至らないケースの割合が低いというニュアンスがあるためにこれを「現実態にある」と訳一視するのは、誤解を招く

1
或るものはデュナミス(能力)によってあると、また別のものは現実態にあると言われる。またエネルゲイア(働き)も、存在するものの一つに数えられている。そこで、可能的なもの(可能態にあるもの)とは何であって、現実態にあるものとは何であるかを考察しなければならない

さて、感覚される領域に可能的なものがあるのは明らかだが、直知される領域にもそれがあるのかどうかは考察してみなければならない。いや、かの所にあるのは、現実態にあるものだけなのだ

しかし、可能的なものとは何であるのか、まず定義しなければならない。そもそも<可能的なものとは>何を用いられてはならないのであろ、どういうのは、可能的なものが、何ものの(可能態)でもないということはあえいえないのだから

だから、可能的なものはまずに他の何かであった上で、それの次に別の何かになりうるとう事由で、<可能的>と言われるのである。その際、先の何かは、次の何かを作り出した後でも存在し続けるか、あるいは自己を、自己をかそれのなにかなるものに提供して、自己自身は滅びるか

さて、可能的なものとは以上のようなものであるとして、ついたいう、可能的なものは、あらうとするものに対して能力であるのだろうか

いや、もし一方、能力が<ポイエイン(作り出す)>という意味に解されるなら、決してそうではない。作り出され作られた能力は、可能的に(何かで)あるとは言われえないだろう

他方、もし<可能的なものの>が<現実態にある>のに対置されるだけでなく、<現実>にも対置されるのであれば、能力は可能的なものでもあるだろう

しかし、<可能的なものの>を<現実態にある>ものに、そして<能力>を<働き>に対置して用いる方がよりよくもあり、より厳密でもあるだろう

さてそこで、可能的なものの上、情態や形や形相の下に横たわる何かみたいのものであり、それらを受け取ろうとしており、また受け取るように生まれついているのである

2
しかし、素材について考察しなければならない。素材は、現実態にあるものか、または何か別のものであるのかも、形成されるものとの関連で、可能的なものであるのか、それとも素材は現実的には何ものでもないのか

また一般に他のもので、われわれが可能的なものと呼ぶ現のものにしても、形相を受け取った時、もとのままの自分として存続しながら、現実態にあるものとなるのか、

それとも<現実態>は形像について述べられるのだろうか

つまり、現実態にある形像は可能的な形像に対置されるだけであって、<可能的な形像>がそれについて述べられるものに<現実態にある>ものが述語されるわけではないのだろうか

述語される、の意味が不明

ここで、可能的というのは、ヒュレーにエイドスが働くのではなく、現実態にある何かがエイドスを受け取って、別のものになると考えられている

現実態にさらにエイドスが働くとそのエイドスは失われてしまうが、二通りあって、青銅が形像に変わっても青銅のエイドスは変わらないが、木材が火に変わった時、木材のエイドスはどこに行くのか？

もし後者だとすると、可能的なものが現実態にあるものとなるのではなくて、先に可能的にあったものから、現実態にあるものが後で生じたわけである

なぜなら、現実態にあるものは両者から合成されたものであって、素材とそれに重ねた形相と(が集まったの)ではないのだから

現実態にある合成された青銅の形像

現実態にある青銅

素材

青銅の形相

形像の形相

現実態にある合成された青銅の形像

可能態にある形像

青銅の形相

同じような合成のされ方であるのに一方が正しくて他方は正しくない

しかし、可能的な文法学者が現実態にあるものになるならば、可能的なものが現実態にあるもののもとが、どう見て同じものでないだろうか。なぜなら、可能的に聞き手であるソクラテス、またにその同一人物が、現実的な賢者となるのだから

しかし、そうだとすると、まさに無知識者が、知識者である、ということになるのか、なぜなら、彼が可能的に知識者であったのだから

現実態にある合成された知識者

可能態にある知識者

知識者の形相

いや、無学者は、付随的に知識者であったわけだ、なぜなら、彼は無学者であった限りで、可能的に知識者であったのではなくて、無学者であることが、たまたま彼に付随していたのである

現実態にある合成された知識者

可能態にある知識者

知識者の形相

実は合成されておらず、素材と形相が集まった状態である

彼の魂こそ、それ自体において――それが原理であるのだから――可能的なものであったのである。知識者となるのも、知識者となるのも魂である

すると、彼は可能的なものをまだ保有しているのだろうか、そしてすでに文法学者であるのだろうか

もろん、そのままだ。

しかし、そうではない。可能的なものは、それ自体において――それが原理であるのだから――、可能的なものであったのである。今では、能力が形相をもっているのである

さて、それでは可能的なものとは下に横たわるものであり、現実態にあるものとは両者の合成物、形像であるとされた。青銅とは、青銅に臨在している形相は、何と呼ばれるべきだろうか

おそらく、形と形相が――これによって形像が単に可能的であるだけではなく、現実態にあるものとなるのであるが――働き(現実性)と呼ばれて不条理ではないだろう

ただし、単独で<働き>と呼ばれるべきでなく、<これこれのものの働き>とでもある、というのは、これとは別のものを、つまり働きをもたらす能力に対置されるものを、よりよく来向な意味で、エネルゲイアと呼ぶのがよいだろうから

というのは、可能的なものは現実態に他者から得るのだが、能力にとっては、それが何者かからなしうることが働きである。たとえば、(場)の性向と、それにちなんで名づけられる働き、勇気と勇敢にふるまうこと、である。

また、それぞれのものは、単に現実的であるだけなのか、それとも働き(エネルゲイア)でもあるのか、またすべてのものが働きであるのか、あるいは、かの所にも可能的なものがあるのかどうかについて

3
そして次に、これらのことがそのために前置きとして述べられていたところの当の問題について、いよいよ語られねばならない。すなわち、直知される領域では、現実態にあるもの とはいったいどういう意味で言われるのか

さて、かの所には素材が――可能的なものは素材のうちにあるけだが――ないとすれば、

もはや他のものに変化することもないし、

また自分は不変で何かを生み出したり、自分を独り出して自分のそれかに他者の存在を許すのでもないとすれば、

またかの所のものは何ものも、自分がまだそれではないものにこれからなろうとしているのではないし、

かの所には可能的なものが居を占める場所があるということになだろう、しかもまた、真に有るものたちは、時間ではなく、永遠をもつのであるから

とすると、もしだれかが、直知される領域、かの所にあるものを考察しようとするのであれば、――というのも、かの所の素材は、別の意味に理解されねばならないにしても、(かの所にある)それぞれのものにおいて、ある部分は素材の、別の部分は形相の位置にあり、そしてあるものはこの両者の合成物であるのだから――

彼らは何と答えるだろうか

では、かの所の素材は、かのものの(形相)に対して可能的なものであるのか

むろん、かの所では、素材の位置にあるものも形相なのだ、というのは魂にしても、形相であり(ながら)他者(英知力と)に対しては素材となりうるのだから

いや、そうではない、かのものは、素材のもとからもっていた形相である。この形相は、魂から やって来るのではなく、思考上で切り離せない(ものである

それは、二重ののとして直知されるという意味でのみ素材をもつのであって、両者は一つの本性である。これは、アリストテレスが第五物体に素材をもたないと言うのと同じようなことである

では、魂については、われわれはどういうのだろうか

いや、魂は可能的にこれらのものであるのではなくて、これらのものへの能力なのである

いや、それぞれが形相であり、完全にそれがそれであることこのものであるから、(現実態にあるもの)である

だから、第一位のものたち(直知されるな世界のもの)は、すべて現実態にあるものである

しかしそうだとしても、(かの所では)すべてのものが現実態にあるであるが、すべてのものが働き(エネルゲイア)だろうか

もろん、かの本性(英知)が眼りを知らないものであり、生命であり、しかも最善の生命であると言われて(『テアイマイオス』54b)正しかったのであれば、かの所の諸々の働きは最高であるだろうと、とすると、すべてのものが現実態にあり、かつ働きである。

そして、すべてが生命であり、かの所の場所は生命の場所であり、真正の魂と英知との知識であり、源泉である

4
さて、可能的に何かである限りの、(素材以外の他のすべてのものは<現実態にある>他の何かであるということを所有している

つまり、すでに後者として存在するものの、他の何かとの関係で、可能的だと言われるわけである

「生命」、「場所」、「英知の始原」などの言葉が定義なく使われている

素材は以外の何かでも可能態にあり

他方、有るとされる素材については、それをわれわれは可能的にはすべての有であると言っているのだが、どうしてそれが現実的に有のどれかであると言えるだろうか

なぜなら、それだろもは中、素材は可能的にすべての有であることができないだろうから

だが、素材が有のどれでもないならば、それは必然的に何でもないだけだ

可能態にある素材として、存在していながら、「有」ではなくが、それ以外の何かである

とすると、どうして素材が現実態にある何かであればよう か、有のどれでもないのに

しかし、素材はそれの上に生じる限りの有のどれかではありえないだろうが、それ以外の何かであることは何ら差し支えない。もしすべての有が素材の上に生じるものではないとすれば、である

素材が素材の上になりたつことは、ない、と言っている???

素材とは無関係に、実知や一者は存在する、つまり「態」の転換を経るものが、有であるのか？

素材は「態」の転換に関わらず存在するもの

「態」の転換を経るものが、有であるのか？

さて、しかし素材が、それの上に働くそれらのもののどれでもなく、そしてこれらは有であるとされれば、その限りにおいて、素材は非有であろう

しかもまた、素材は形相を欠くものとして表象されるのであるから、形相ではありえないだろう。したがって、素材はかの所のものの(のなかに)数えられることもできないであろう

とすると、この意味でも素材は非有であるだろう。とすると、素材は両方の意味で非有であるので、より多く非有であるだろう

さて、素材は、一方において真実に有るものの本性を忍耐しており、他方において有ると言って言われているものたちの(感覚されるもの)の本性にも及びえない

――なぜなら、素材はこれらのものとちがってロゴス(条理)の直観できないのだから――

とすれば、素材はいたいどんな<有る>のなかに見出されうるだろうか。しかし、それがどのような<有る>のなかにもないとすれば、それは現実的に何であるだろうか

5
では、われわれはそれについて、どう言うべきか、また、どのようにしてそれが、識っべき有るものの素材であるのか

それは素材が可能態にしてあるものだから

素材の<有る>は、いわば<有るだろうもの>へ延期されているのである

すると、すでに可能的だからという理由で、すでにあるだろうか、否、素材のもつ<有る>は、あらうとしているものを告げているだけである

未来における可能性というのがアンシャルをもっている。すなわち、現実態となったときのポテンシャルはその現実態に転換しうるポテンシャルは常となる、と考えると素材は現実態に優れてそのポテンシャルが高い？

だから、素材は可能的に何かであるものではなくて、可能的にすべてである

ただし、素材はそれ自体としては何ものでもなくて、単にそれがそれであるものの、つまり素材であるにすぎないので、現実態にあるものでもない

とすると、このものは非有であろう。それも、単に有と言えるものの、たとえば動、という意味ではない

なぜなら、素材が現実態にある何かであるならば、素材はそれが現実態にある形態として、そしてあるものとなるところのものであって、もはや素材ではないことになろう

すると、それは完全に素材であるのではなくて、たとえば(現実態にある)新たな形相の兼ねなる<>)青銅のようなものであるだろう

なぜなら、動は有の上に乗っており、いわば有から生まれ、そして有の内にあるのだが、他方、素材はいわば知り出されれ、すっかり分離され、自分では自分を変化させるためにも、最初にあった通りのものとして

――そしてそれは非有であったのだが――

そして、素材はあらゆる有から離れていたので、最初に現実態としてある何かであったのではない。(その後に何かに)なったのでもない

永久にそのままである

そして、先のあの有たちがすでに停止した時に、素材は姿を現して、自分の後から生じたものたちによって把握されて、これらよりも後の、最後のものとして成り立ったのである

形相と複合物の両方

というのも、素材にもゾにもうとしたものがあっても、素材はそれらから色づけられることすらできず、それらとは地者としてとどまり、その後で生じるものとの関係では可能的なものである

だから、素材は両方によって把握されたのだから、現実態としてはどちらに属するのでもないだろう

そこで、ただ一つそれに残されている道は、単に可能的にのみあり、無べい、おぼろな、どのようにも形を与えられえない幻影であることである

だから、素材は現実態として幻影である。だから、現実態としては虚偽である。そしてこれは「真実に虚偽(『国家』II382a)」と言うのと同じことである。そしてこれは「あり方とそれらのもの(『ティマイオス』254d)」と言うことである

かくして、素材は現実態として有るものであるとすれば、それは(その他のすべて)よりも有るものであり、したがってまた真に有らぬものである

とすると、このものの実相は非有に存するのだから、現実態として何らかの有であることは、このものにとっては通じることである

したがって、このものが有らねばならないとすれば、このものは現実態としては有らぬものでなければならない

なぜなら、このものは真実に有ることから逸脱しているので、有らぬことにおいて有ることをもたねばならないのだから

というのも、もし君が熱的に有るものから、その熱性を取り去るならば、それらがもっていた何らかの有性をも取り去ることになるだろうから

また、有ることと有性とを可能的にもつものに、現実性を君が付与するならば、そのことによって君はこれらのものの存在の原因を減ぼすことになるだろうから。なぜなら、これらのものの<有る>は可能性の内にあったのだからである

したがって、もし素材を不滅のものとして保存しなければならないとすれば、それを素材として保存しなければならない

したがって、素材が欠るがまままのものであるためには、「素材は単に可能的にのみ有るのだ」と言わなければならないようである。さらなければ、以上の論を反駁しなければならない

可能態にあるものの内で最も可能性が高いのが素材である??

したがって、素材が

有である

現実態にあるもの

現実態にあり可能態も持ちうるもの

素材

有でない何か

これが、なぜ、「素材が何かである」条件となるのか??

だが、それらに始原をもつものがあるのか？